

# 大正ロマン、昭和モダンの面影が残るまち

## 玉淀文化を支えた佐々紅華

### 玉淀文化の歴史を探る①



佐々紅華

寄居駅の改札前に設置されたスピーカー。近寄ると、寄居縁の作曲家・佐々紅華の代表作で、故フランク永井のリバイバルにより、第三回日本レコード大賞を受賞した名曲『君恋し』のメロディが流れてきます。

今年、浅草オペラの創始者ともいわれる佐々紅華の生誕130周年、そして浅草オペラ100年の記念の年です。

多くの巨匠に愛されたまち・寄居。今も残る大正ロマン、昭和モダンの面影をたどりながら、玉淀文化の歴史を探ります。



京亭

## 玉淀を愛した巨匠たち

寄居町の市街地には、大正から昭和にかけて建てられた歴史的建造物が今なお、ところどころに残っています。きっと当時は時代の最先端をいくモダンな建物だったのでしょう。今となっては、懐かしいレトロな雰囲気醸し出しながら町並みに溶け込んでいます。

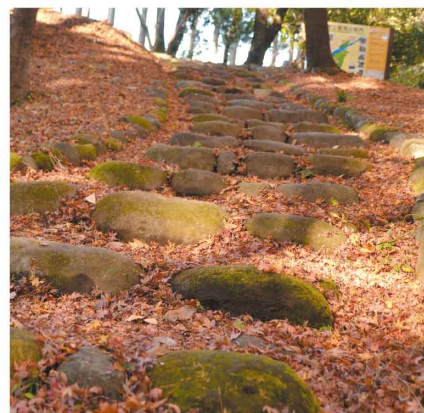
そんなノスタルジックな町並みを巡りながら、荒川沿いを歩くと、宮沢賢治が秩父方面への地質調査の途中、立ち寄った玉淀で詠んだ歌の歌碑をはじめ、

多くの句碑や詩碑が点在し「ふるさと文学碑歩道」として、親しまれています。

このように、宮沢賢治のほかにも、大正から昭和の時代には、県指定名勝玉淀の美しさに惹かれ多くの巨匠たちがこの地を訪れています。

歌舞伎役者、七代目松本幸四郎もそのひとりで、荒川を望む正喜橋近くの敷地（現在の雀宮公園）に別邸（雀亭）を建て、たびたび訪れていたということです。

その後、当時の流行歌を数多く作曲していた佐々紅華が、東京から移り住み、玉淀の観光開発に力を注いでいた町民と深く関わることとなります。また、



雀宮公園に残る石段

戦時中は、西洋画の大家・安井曾太郎が寄居に疎開しており、近世では、小説家の井伏鱒二や、時代小説で有名な池波正太郎が、寄居を舞台に作品を書き綴っています。

大正から昭和にかけて、活躍した寄居町ゆかりの作曲家・佐々紅華。その才能は、音楽だけにとどまらず、建築、デザインと多岐にわたりました。

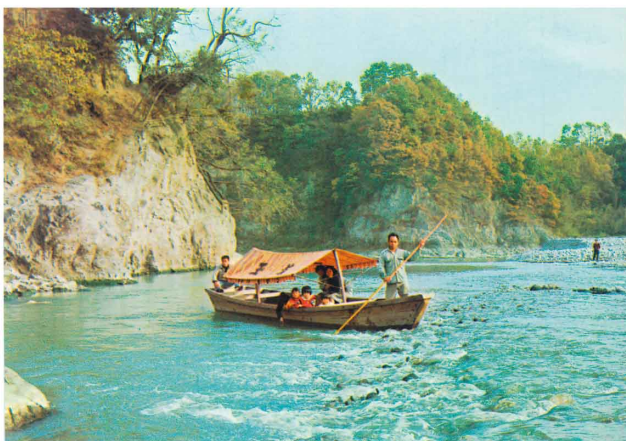
作曲家としての紅華は、浅草オペラの創始者として活躍し、数々の流行歌を手がけました。代表作の「君恋し」をはじめ、「祇園小唄」や、寄居を唄った「寄居小唄」などを世に送り出し、一世を風靡しました。

紅華は、縁あって寄居町に移り住み、昭和七年から亡くなる昭和三十六年まで居住していました。その邸宅が、意匠の細部までこだわり、自らが設計した現在の「京亭」です。

時代に花開いた大正ロマン、昭和モダンを体現した希有のアーティスト佐々紅華。玉淀文化を支えた偉人のひとりです。

## 町の観光ことはじめ～玉淀の歴史～

玉淀文化を育んできた玉淀の地は、今もなお美しい景観を伝えています。しかし、玉淀が今のように景勝地として人々に愛されるようになるまでには、紆余曲折の歴史がありました。切り立った崖と清流の美しさに変わりはありませんでしたが、大正ごろまでは、荒川兩岸の樹木がうっそうと茂り、川で漁をする人々以外は、ほとんど訪れる人もなかったといえます。



玉淀の景観を生かそうという試みは、大正2年に初めて起こりました。寄居町青年会が費用を出し合って、荒川に沿っておよそ500本の桜の苗木を植えたのです。しかし、当時は必ずしも理解が得られる状況ではなかったようで、多くは邪魔にされたり、切り倒されたりしたそうです。こうした中でも残された桜は成長し、人知れず花を咲かせ、世に出る日を待っていたのです。

玉淀の桜に転機が訪れたのは、昭和6年のことでした。桜並木を世に出したい、そのためには荒川に沿った遊覧道路を造ろうという計画が立てられたのです。道路の建設には、大変な苦勞があったようですが、市街地町民の支持を背景に、その年の桜の咲く時期までに完成をみました。道に沿って桜も補植され、美しく整備された桜並木には、多くの人々が花見に訪れて大変なごみをみせたといえます。この時に初めて整備された道が、おおよそ今の「ふるさと文学碑歩道」のある通りです。

さて、関係者の努力で生まれ変わった桜並木の評判は大いに広がり、埼玉県史跡名勝天然記念物調査員を務めていた宝登山神社宮司の塩谷啓山氏の耳にも届くことになります。現地を訪れた塩谷氏は大いに賞賛し、景勝地として新たな名前を付けることを勧めたそうです。こうして、昭和6年4月29日、この地は「埼玉県にある玉（埼玉の「玉」で美しいの意）のように美しい淀みの地」という意味から「玉淀」と名づけられ、県の名勝に指定されました。同時に今の寄居町観光協会の前身である「寄居保勝会」が結成され「玉淀ライン船下り」や「玉淀水天宮祭」などの新たな観光事業の推進もあって、町の観光が大きく発展していきました。

大正時代に始まった玉淀の観光開発は、はじめこそ理解されなかったかもしれませんが、その志は遊覧歩道の整備を経て、町を一大観光地へと発展させ、大正から昭和にかけて隆盛した玉淀文化の発展へと結実していったのです。



玉淀の今昔

